

博士学位論文公聴会が開催されました

平成26年度博士後期課程の学位論文公聴会が8月1日(金)、T-1002教室で開催されました。今回の発表者は岸博之さん。論文題目は「建築に見られる継承行動に関する研究」でした。博士前期課程で検討した、住宅の改築と継承意識の関連についての研究を発展させ、まとめられました。

建築に見られる継承行動に関する研究

名城大学大学院総合学術研究科博士後期課程
学術番号 113891502 岸 博之

50歳になって、「自分を変えよう」と一念発起して総合学術研究科博士前期課程に入ってこられた岸さん。やや緊張した様子を見せながらも、気合い十分でした。

今回の研究は大きく2つの研究で構成されており、それぞれから次のことがわかりました。

1. 人が継承欲求を抱いてから行動に至るまでには、どんな心の動きがあるの？

住宅の継承には住まい手の欲求や意識、価値観が存在し、それが継承行動に表れると考えます。今回の研究で、これら価値観と意志決定の構造的な関連性を解き明かすことができました。

簡単に説明すると、継承行動に至る人の心理には、自我関与の程度と、価値を選択する際に生じる心理的圧力(マズローの唱える基本的欲求から見る、生きるための自我関与)が介する構造が存在することがわかったのです。

2. 継承意識はどこから生まれるの？いつ頃芽生えるの？

大学生を対象に質問紙調査を行った結果、居住改善志向や住み心地観など、継承行動につながると考えられる7つの意識因子が抽出されました。それぞれの因子が影響しあうことで、継承意識(継承価値観)が高まるようです。

また、この調査を通じて、大学生という若い世代でも継承価値観を持っていることが判明しました。



最後には今回の研究成果を住宅設計に応用するものとして、住宅のリフォームの際、施主の意向を具体化するソフトウェアの紹介がありました。これをもとに施主と建築士がやりとりをし、施主が真に満足できる住宅設計に近づけようとするものです。

発表後の質疑は大変活発で、予定の時間を大幅に超えました。仮説の妥当性や結果の解釈、質問紙調査対象を青年期である大学生とした理由など、異なる専門分野の先生が様々な観点からの質問を投げかけました。このあたりが総合学術研究科のユニークなところですが、発表者は大変ですね。

複雑な事象を解明するために、その事象を細分化・単純化し理解することによって、もとの事象を理解しようとする要素還元主義では、近年の様々な問題を解決できません。もっと複眼的で俯瞰的な視野が必要とされるのです。



総合学術研究科はこのような背景から設立されたのですが、今回の研究は、設計者として工学的発想を持つ岸さんが、人文学的発想で得たこと(継承)をテーマに、数学的発想の方法(数理モデル)で検討したものです。まさに総合学術研究科が標榜する文理融合を具現化したものでしょう。今後のさらなる活躍が期待されます。